

「英傑」の全体像に迫る（伊藤之雄『伊藤博文』）

伊藤博文の名を聞いて（二十数年前まで用いられてゐた）旧千円札を連想するのは、評者のみだらうか。その頃、評者は小学生だったため、聖徳太子の肖像が描かれた五千円札や一万円札といった高額紙幣に触れる機会は年始の「お年玉」など限られてをり、お札と云へば、岩倉具視の肖像が描かれた五百円札と伊藤の肖像が描かれた千円札であつた。

その後、中学受験のために勉強する過程で伊藤が大日本帝国憲法の起草に関はつたことなどを知り、「お札に肖像が描かれて然るべき英傑」といふ印象を抱くようになる。さうした印象は、中学や高校の授業でマルクス主義的な立場から「朝鮮侵略の首謀者」と聞かされても全く変はらなかつた。

大学で「第二維新」を目指す民族主義運動を研究対象に選び、「右」からの伊藤批判にも接して印象は変化したが、伊藤が「英傑」だといふ基本的な認識には些かも変化がない。とは云へ、その全体的な人物像を俯瞰できる著作がなく、あくまで断片的な印象の積み重ねに過ぎなかつたが…。

そこに登場したのが本書である。膨大な新史料や最先端の研究を踏まえながら、伊藤の全体像に迫るものとなつた。文章も極めて分かり易く、六百頁に及ぼんとする大著でありながら読み通すことに抵抗はない。

「憲法政治」実現に懸けた全生涯！—— と帯にもある通り、政治家としての伊藤は帝国憲法と共にあつた。国会開設・憲法制定などを求める自由民権運動が高まる中で、政府部内でも憲法制定に関する論議がなされる。しかしながら、ヨーロッパに関する生齧りの知識を繋ぎ合はせただけであつたり、時期尚早と主張するのみで具体的な対案がなかつたりといふ有様だつた。

伊藤は、さうした同輩たちと異なり、近代的法体系の整備—— 不平等条約を改正するためには必須—— といふ時代の要請と天皇を始めとする我が国の伝統との狭間で、実質的な憲法規範の確立を目指す。

急進派の大隈重信を排して明治政府の最高実力者となつた伊藤は、井上毅らと憲法の条文を起草するのみならず、その運用に伴ふ諸制度の改革、ひいては国民の意識向上にまで幅広く気を配つた。開設当初の帝国議会在紛糾を繰り返しつつも機能を果たし、憲法停

止といふ最悪の事態に陥らなかつたのは、ひとへに伊藤の政治的力量ゆゑだらう。

このやうな伊藤を明治天皇も深く御信任あそばされ、特段の問題がなければ具体的な政治的判断を示されなくなつた。この点について、著者の伊藤之雄氏は「君主機関説」との関連で理解されてゐるが、古代より続く「天皇統治」の新しい段階だと評することもできるのではないか。

もう一つ読者の関心を引くのは、私生活に関する記述だ。伊藤には「英雄色を好む」といふ俗諺を地で行く人物だとのイメージがある。確かに、梅子夫人以外の女性に子を生ませたり、六十代半ばとなつても複数の芸者を寵愛してゐたといふ。けれども、著者によつて紹介されるエピソードからは、夫人を対等な存在として信頼し、子供たちに深い愛情を注ぐ伊藤の意外な側面が窺はれる。

臨時国会の冒頭に行はれた所信表明演説において、鳩山首相は「無血の平成維新」と述べ、国政の抜本的改革を謳ひ上げた。だが、伊藤ほどの見通しと実行力が伴つてゐるか甚だ疑はしい。「改革」の真偽を見抜くためにも、是非とも一読しておく必要があらう。